昼の部 13時30分開演（13時開場）

蚊相撲（かずもう）

ある大名が相撲の者を抱えようと、太郎冠者を上下の街道へ向かわせます。太郎冠者が連れて帰って来たのは、相撲が得意という不思議な顔立ちをした男でした。大名は自ら相手をして相撲を取りますが、取り組むやいなや、大名は「シクシク・・・」と刺されて、ふらふらになります。男が江州（今の滋賀県）守山の者というところから、蚊の精であろうと気づきます。蚊は風を嫌がるので、扇子で扇ぎながら今一勝負しようとしますが・・・

この「蚊の精」に使用する面は「うそ吹き」。うそとは口笛のことで、口笛を吹く尖らせた口が特徴です。この「うそ吹き」時には「案山子」「貝」「天狗」などなどの役もこなし大変忙しい面です。

惣八（そうはち）

ある家の主人が僧侶と料理人を召し抱えるため高札を揚げます。そこへ最近まで料理人をしていた僧侶と、最近まで僧侶であった惣八と名のる料理人がやって来てこの主人に雇われます。主人は僧に法華経の読経を、惣八には鯛と鯉を料理するように言いつけます。二人はやり慣れないことに戸惑い、相談して元の仕事と取り換えます。料理人姿の惣八が経を読み、元料理人が僧の姿で料理をして・・・

元出家の料理人と元料理人の出家が、同じ主人に抱えられたことから起こるドタバタ喜劇です。また鯛と鯉を乗せたまな板を出して元料理人の出家が料理をする手付きも見ものです。

蟹山伏（かにやまぶし）

修行を終えた山伏が、弟子の強力を連れて故郷へ帰ろうとします。途中、江州蟹ケ沢へ通りかかると、にわかに空が曇り、目の前に異様な者が現れます。その者は「二眼天に在り、一甲地に着かず、大足二足、小足八足、右行左行して、遊ぶ者の精にてあるぞとよ」という謎をかけます。二人は蟹の精であると気づき、強力が金剛杖で打ちかかると、逆に耳を挟まれてしまいます。それを引き離そうと祈る山伏もまた耳を挟まれてしまい・・・

江州とは近江国、すなわち現在の滋賀県のことです。蟹の精の扮装がユーモラスで、全体的におとぎ話のような展開でわかりやすい作品です。

夜の部 18時開演（17時30分開場）

竹生島詣（ちくぶしままいり）

主人が仕事をサボって留守をしていた太郎冠者を叱りにやってきます。しかし竹生島詣をしたと聞いた主人は太郎冠者を許し、竹生島の様子を尋ねます。さらに珍しいことは無かったかと問われた太郎冠者は、主人の機嫌を直そうと、「犬・猿・蛙・口縄（蛇）」が集まって秀句を言ったと語ります。「犬はいぬ」「猿は去る」「蛙は帰る」と秀句を言いますが、「口縄」の秀句で詰まってしまい・・・

秀句とは駄洒落のことです。室町時代に流行した秀句の言葉のおかしみを主題とした狂言です。

梟（ふくろう）

兄が山から帰ってきてから病気になったので、弟は山伏に祈祷を頼み、家に来てもらいます。家に着いた山伏が祈祷を始めると、兄は奇妙な鳴き声をあげます。弟に話を聞くと、兄は山で梟の巣にいたずらをしてきており、この病はきっと梟が憑いたものであろうと懸命に祈祷をするのですが・・・

山伏は能「葵上」の謡を重々しく謡って登場し、祈祷を始めますが、後半は祈祷が失敗して狼狽します。その様子の落差が大きく、笑いを誘います。

靫猿（うつぼざる）

大名が太郎冠者を伴って出かけた狩りの途中で猿曳きに出逢います。大名は自分の持っている靫に猿の皮をかけたいので、小猿の毛皮を譲ってくれと猿曳きに迫ります。その為には小猿を殺さないといけないので、猿曳きは一旦は断りますが、大名は猿曳き共に射ようと矢を向けます。やむなく承知をした猿曳きは因果をふくめ一打ちにしようとしますが、無邪気な小猿の様子に殺しかね泣き伏してしまいます。その様子を見た大名は・・・

狂言では珍しく劇的な構成と展開をもった大曲で、大名・太郎冠者・猿曳きの性格や心理もきっちりと描かれています。前段は猿を譲れと言う大名と毅然とした態度の猿曳きとの緊迫したやり取り。中段は猿曳きの小猿への愛情と愁嘆。後段はあどけない小猿の舞と、それを真似る大名のやりとりへと変化して、祝言性に富んだ狂言屈指の名曲です。題名にもなっている靫とは矢を入れて携行する筒状の容器のことです。

狂言には人以外にも神仏、動物、植物など生活に密着した様々なものが登場します。今回の狂言会は生き物が登場する演目を集めました。実際に着ぐるみが登場するものもあれば、生き物の精霊が出てきたり、洒落に使われるなど、その登場の仕方は様々です。

当時の人々と生き物の生活の様子をぜひお楽しみください。

十四世 茂山千五郎